

小中をつなぐ古典学習の提案（1）

－ 和歌（『万葉集』）・『竹取物語』を事例として －

森 顕子
国語科

要 約

新しい学習指導要領を見据えて、古典学習による小学校と中学校との連携を模索した。新学習指導要領を意識した小学校中学年における俳句ほかの古典を扱った授業を参観し、その授業分析を踏まえて、いくつかの提案を行った。和歌では『万葉集』を事例とし、他に「竹取物語」を取り上げた。教材開発という面ばかりではなく、児童生徒の交流場面も設定していくことによって、一層、古典学習は身近なものになると考えられる。

古典学習を串とした小中連携は有意義であり、その「串」の部分について今後研究を進めたい。

キーワード 古典学習 小中連携 交流授業 万葉集 竹取物語 俳句

I はじめに

新しい学習指導要領が平成20（2008）年3月に告示され、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項が位置づけられたことにより、今後の古典学習の有り様は大きく変化した。

まず、小学校の現行の学習指導要領においては、第5学年及び第6学年に「文語調の文章に関する事項」として、「易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと。」とあるのみであったが、新学習指導要領においては、低、中、高学年それぞれに具体的な学習内容が示されている。また、中学校についても、現行の学習指導要領においては、「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、「読むこと」に関する指導の留意点の一項としてまとめて記されていたものが、やはり各学年に具体的に学習内容が示されている。

これにより、今までの、古典学習の入門期は中学校からという意識は、小学校を受けての長い入門期の出口と捉えていくことも考えられよう。それはすなわち小学校での古典学習との出会いを踏まえて中学校で古典学習とより親しめる内容を考えていく必要がある、と言い換えることもできよう。

これからの古典教育は小学校から中学校へとつながっていく。中学校の立場から、和歌や「竹取物語」

を例として、小中の連携・交流といった視点から、小中をつなぐ古典学習を中学校の立場から提案したい。

II 小中の連携を意識した古典学習の提案

1. 和歌（『万葉集』）

中学校で再会することになる和歌の中でも、最初に学習する『万葉集』を例として考えた。現行の小学校の教科書での『万葉集』の採択状況は、次の通りである。

ア 石走る垂水の上のさわらびの

萌え出づる春になりけるかも 志貴皇子

【光村図書、教育出版】

イ 春過ぎて夏きたるらし

白たへの衣ほしたり天の香具山 持統天皇

【学校図書】

ウ 東の野にかぎろひの立つ見えて

かへり見すれば月傾きぬ 柿本人麻呂

【教育出版、東京書籍、大阪書籍】

エ 田子の浦ゆうち出でて見ればま白にぞ

富士の高嶺に雪は降るける 山部赤人

【教育出版】

学年配当は、東京書籍のみ第5学年で、他の四社はすべて第6学年となっている。現行の学習指導要

領では第5学年及び第6学年に位置づけられていたわけであるが、新学習指導要領では、第3学年及び第4学年に「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。」とある。つまり、音読を通して文語調の文章に親しみ言語感覚を養う、といったところから、「情景を思い浮かべる」という一歩踏み込んだところまで学習することを考えていくことになる。

実際に中学年の子どもたちが、俳句や和歌にどのような取り組みを行うのかを、この新指導要領を意識した第3学年・第4学年における授業参観の機会に、みる事ができた。

1. 1. 中学年における俳句の実践（参観授業を中心として）¹⁾

1. 1. 1. 学習の流れ

- (1) 標語など身近なところから五七五のリズムを意識する。
- (2) 俳句を音読する。
- (3) 季語を学ぶ。

1. 1. 2. 対話的リフレクションから

1. 1. (4) 授業記録

(4) 俳句を作る。

(5) 句会を開く。

授業は、11月に第4学年、12月に第3学年と2学年とも行われたが、教材を変えたり、第3学年には絵本を用いるなど、発達段階に合わせた形で工夫され、学習の流れ自体は変えずに実践された。いずれの学年でも、この内容を6時間余りで実践されていたが、それぞれの学習活動における時間がきちんと確保されれば、中学年の子どもたちでも、俳句について十分に楽しく学べる事がわかった。これは、俳句の場合、交通標語等で子どもたちがすでに出合っており、親しみやすいということ、その一方短歌は散文・ストーリー性があるため、俳句に比べると難しく感じられるところがあるので、学習する順番としては、まず俳句と出合わせて、それから短歌の方が無理がないのではないかという授業者の意図がある。これはまず第4学年で実践し、その後修正を加えて第3学年で実践した成果とも言える。

11月25日(火) 俳句(5/6)

9:25~10:10 4年1組

	授業の流れ	参観者による記録
9:25	★始業挨拶・授業準備	
9:30	■起立し全員揃って「寿限無」暗唱	・児童の表情は明るく楽しんでいる
9:33	■視写(菜の花や…)	・取りかかりには個人差あり
9:40	~ワークシート配布~	
9:42	■絵本、読み聞かせ(☆→児童が大きく反応した句) □夏☆なめくじが… ☆おいしそう…	・秋になると、音数を指折る児童が数名
9:45	□秋☆どんぐりを…	・ <u>集中力は秋の後半から下降</u>

	☆いわしぐも…	・ <u>児童の着眼点が、内容から単なる言葉のオノマトペや挿絵のおもしろさへと浅くなっている</u>
9:48	□冬☆かまきり… ☆こんこん…	
9:52	～ワークシート配布～（「春」記入） ■言葉集め □30秒間「春」をイメージする言葉を思い浮かべる ・起立して発表し、言葉が重なったら着席	▽「春」だけなのか、他にもやるならどこを精選するのか
9:57	■助詞に着目 □調子を整える言葉に丸を付ける	▽「5, 8, 5」でもよいのか、 いうタイムリーな児童の発言をすくいとる流れは自然だが、説明内容が多くなった
10:02	■俳句作り	▽机間支援の中からの補足説明が多い (再設計時に生かす)
10:13	■作品、ワークシート貼付	・児童は楽しげだが、忙しげでもあった
10:19	★終業挨拶・ワークシート回収	

<参観者の気づき>

- ・教師が落ち着いて意図した時の児童への注意喚起、引きつけ方はハイテンポであるが、児童もよくついてきている。
- ・俳句作りの時間の中で、児童同士が交流できる場面を設定すると、作品の質や意欲の向上につながる。特に、言葉集めに苦慮している児童への手当てがもう少し必要。場合によっては、グループの形態も有効か。
- ・読み聞かせの中で、「温泉」「かまきり」への対応は、落ち着かない児童の個別ケースとして、それぞれ適当だった。
- ・学習内容が多すぎる。説明がやや早口で、追いつかない児童もいた。
一つ一つの活動について整理し、丁寧に扱えると、児童も全体としてじっくり取り組めるのではないか。
- ・学級担任は、教室環境整備と生活指導上の支援がされていたが、内容についての関わり方については、授業者との打ち合わせがあった方がよいと思う。
- ・授業時間を延長せざるをえなかったことについては、次の授業の再設計時に生かすべき。
学級を借りて行う授業の諸条件については、今回の実践期間を踏まえれば、それを含めて45分間で収められるのではないか。
- ・全体として学習内容が明確であり、児童も興味をもって取り組める仕掛けがふんだんに施されていた。児童はその仕掛けを十分楽しみ、そして教師の熱意が教室に溢れた授業であった。

授業設計時における授業者の意識は、教材としての俳句の作品選びに強く向いていた。授業については、設計について十分に時間をかけ、手を尽くしたこと、過去の成功体験からもあまり不安を持つことなく取り組んだ。その結果、全体としては学習目的を達成し、子どもたちも楽しく学ぶことができた。

1. 1. (4)については、俳句を作り、句会を行うためのイメージ作りとして絵本の読み聞かせがされ

たが、参観者の記録部分の下線部にあるように、春夏秋冬と読み進められていくうちに、俳句を学ぶ、という集中力は「秋」の前半までで、あとは表層的なことば遊びに子どもたちの興味は移っていった。時間配分や提示の工夫が、発達段階や集団の実態に応じて必要であったわけであるが、これは、次に実践された第3学年の授業設計に生かされた。

1. 1. 3. 児童作品の分析

子どもたちが作った俳句

季節	3年生の作品	4年生の作品
春	たことばし 遊んでいたら とんでった たんぼぼが フワッと空に とんでいく <u>うぐいすが ホーホケキョウと ないている</u> <u>チューリップ 赤白ピンク きれいだな</u> えんそくで おべんとうない たいへんだ たんぼぼが 春風でたねが ちらばって たんぼぼの 黄色い色が きれいだな	桜の木 はながまんかい きれいだな お正月 おもちもちもち おいしそう 年賀じょう だれにかこうか きまらない かざぐるま 動くと回る くるくると たけのこが 一生けんめい 生えている 菜の花が たくさんさいて ハチがくる たけの子の 頭のぶぶん でてきたよ <u>うぐいすの 鳴き声きいて 春を知る</u> ふきのとう 雪からとけて 目を覚ます お正月 おばあちゃんから お年玉 いぬふぐり 青くかがやく 空の下
夏	あじさいが きれいにさくよ 雨の中 <u>すいかはね じつはやさいの なかまだよ</u> <u>すいかわり 夏に楽しく やっている</u> 雷は ゴロゴロおちて こわいよね 風りんが ちりんちりと 音がなる 天の川 銀河の星が いっぱいだ すっぱくて すごくおいしい うめぼしは かしわもち もちもちしてて おいしいな かぶと虫 くぬぎの森の 人気者 <u>みなとみらい 花火がドカーンと 打ちあがる</u> せんぷうき ありにとっては 台風だ 雨の日に カエルピョコピョコ おもしろい さくらんぼ ふたごなかよし かわいいな 七夕に ねがいをこめて たんざくに 雨のあと きらきらひかる 虹の色	ひまわりが 真っ赤な太陽 見上げてる 夏祭り みんなで行けば 楽しいな せんぷうき でんげんいれて かせが出る かき氷 ひんやりつめたく おいしいよ 海行って 真っ黒けっけ 日焼けした かたつむり 雨の日にいる なぜだろう かき氷 頭いたいよ どうしよう 七夕で 願いがかなうと うれしいな ひまわりは せいたかのつぼで さいている 天の川 おりひめたちは 会えたかな <u>すいか食べ タネマシガン よく飛ぶよ</u> かき氷 食べすぎ注意 ほどほどに 紫陽花が 美しく咲く 梅雨の花 風鈴が 美しい音色 聞かす夏 かき氷 キーンとなるけど おいしいぞ

秋	すきな色 オレンジ黄色 もみじ色 七五三 めんどくさいな きがえるの おいもほり みんなといっしょ うんとこしょ 赤い羽 秋のきせつに ぴったりだ <u>もみじの葉 たくさんおちて あそべるな</u> 秋まつり 楽しく遊ぶ 子どもたち すず虫が きれいな音を ひびかせる どんぐりが あたまの上に こつつんこ すずむしの りーんりーんと なき声だ	コスモスが いっぱいさくよ きれいだな いいにおい 秋のみかくの くりご飯 やきりんご とてもあまくて おいしいな <u>もみじの葉 道にいっぱい 赤子の手</u> 秋休み やきいもたべて おいしいな
冬	ガラガラペ 手あらいうがい かぜよぼう クリスマス ケーキ食べるの 楽しみだ 大みそか 今年もこれで 終わりかな <u>つばきはね 赤白きいろ きれいだな</u> すごろくは どんなすうじが でののかな レモンはね ちょっとかじると すっぱいな 冬がきた こたつにはいって あったかい 雪がふり 子どもがはしゃぐ わいわいと	かぜよぼう インフルエンザ はやりつつ 雪だるま 一人ぼっちは かわいそう 手ぶくろを するとほかほか あったかい クリスマス 待ちどおしいな プレゼント 冬休む 元気で外で 遊んだよ スケートで いつもすべって 楽しいな クリスマス くつ下の中 プレゼント みかんがり いいものとれた 食べきれない ずわいがに ごうかすぎるぞ 食べられない 寒い日に こたつでおもち 食べたいな 大みそか かねがなるなり ほうりゅうじ

実際に子どもたちが作った俳句が上記の表になる。下線を引いた作品を抽出して分析したい。

(1) 同じ題材を取り上げながら、発達段階がみえやすい作品

① 「うぐいすがホーホケキョウとないている」

→ 「うぐいすの鳴き声きいて春を知る」

② 「すいかはねじつはやさいのなかまだよ」

「すいかわり夏に楽しくやっている」

→ 「すいか食ベタネマシガンよく飛ぶよ」

③ 「もみじの葉たくさんおちてあそべるな」

→ 「もみじの葉道にいっぱい赤子の手」

①は、第4学年では、「ないている」で終わらず、「春を知る」とつなげて情感がにじんだ句となっている。

②と③は、いずれも第4学年では「マシガン」「赤子の手」といった比喩を用いて豊かに表現されている。

(2) 標語的な作品

「ガラガラペ手あらいうがい かぜよぼう」

「かぜよぼうインフルエンザはやりつつ」

季節を表してはいるが、ポスターに書き添えられそうな作品である。

(3) ことば遊び的な作品

① 「チューリップ赤白ピンクきれいだな」

「つばきはね赤白きいろきれいだな」

② 「大みそかかねがなるなりほうりゅうじ」

①は童謡の「チューリップ」からの連想であろうし、②は正岡子規の「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」の連想であることは、まちがいない。オリジナルがモアベターであるところにつなげていけるとことば遊びでとどまらずに済むのではないか。

他にも、「みなとみらい」や「ずわいがに」といった、ごく私的な具体的な体験が作品に取り入れられたものも見られ、子どもたちが生き生きと活動していた様子が伝わってくる。中学年で十分に俳句を楽しめた何よりももの証であると思う。また、句会も

2時間かけることとなったが、やはり楽しい活動となったようだ。

そこで、小学校の新学習指導要領と1. 1. の実践を踏まえ、また中学校で同じ作品と再会するということもおさえた上で、小学校中学年で行えそうな学習活動を提案したい。

1. 2. 百人一首から入り、百人一首から出る

〈イ・エ〉

中学校では一般の小倉百人一首を用いて行われるが、小学校中学年という発達段階を考えると、20首で一組となっている TOSS による「五色百人一首」が適当であると思われる。実際に小学校第4学年で行われているのを参観した²⁾が、教師による様々な仕掛け（ルールや意識づけ、空札の2枚は次回に行う色の20首から選び、同じ色で対戦する間変えないので、子どもたちが特によく覚える等）はあるにしても、45分間で3回対戦が行われたが、集中力が途切れずに取り組んでいたこと、よく歌を覚えていたし覚えようとしていたことが印象的であった。通常は、一試合5分程度で6～7回対戦が行われる。また、下の句の書かれた取り札の裏には上の句が書かれており、対戦の途中で上の句を確認しながら進めていた。これは、下の句を言い終わるまでの間は、机上の札を裏返して上の句を確認してもよいというルールに基づくもので、歌を覚える一助であったと考えられる。

すなわち、中学年で、百人一首として和歌を扱うことは、子どもたちにとっては何の違和感もないと思われる。そこで、イ・エの2首の情景などを確認した後、また対戦に戻っても楽しくできるのではないか。

1. 3. 和歌の作品世界を表現して楽しむ

1. 3. 1. 暗唱し、工夫して音読する

〈ア・イ・ウ・エ〉

一人で読むだけでなく、グループや集団で声を合わせたり繰り返したりと工夫を凝らすことでリズムを楽しめる。

1. 3. 2. 暗唱し、歌の情景を表した短いお話しを作る

〈ア・イ・ウ・エ〉

ことばを手がかりにしながら歌の情景を想像し、

どんなストーリーがあるか、考える。一人で考えてい出せて、歌の情景がイメージできる状態であると、もよいし、後でグループで作り上げていくことも中学校での導入部分がスムーズに行える。

きる。歌の景色の説明ができれば十分と考える。

例：ウ

1. 3. 3. 複合的に活動を組み合わせる

〈ア・イ・エ〉

(1)暗唱

(2)作者の感情を児童の言葉で表す

(3)動作化で表現

(4)ポスター作成

例：ア

(1)まずは個々で暗唱することになる。発表の形態にも自分が選んだ歌以外の歌も暗唱できるようにしておく。できれば、グループ発表の前か後に、全員での暗唱を位置づけるとよいと思う。

(2)「春が来たね!」「うれしい!」「暖かくなるよ!」といった、具体性のない表現でよい。作者が歌の込めた想いのようなものを受け止めて表現する。

(3)「水の流れる様子」「さわらびが伸びていく様子」等を体を動かして表現する。「景色を見ている作者」もイメージできれば、表現できるとよい。

(4)最もインパクトの強いものをポスターとして描く。ここでは、「さわらび」を絵で描けるとよい。ただし、複合的な活動とするならば、岩の間を流れていく雪解け水の様子や作者などをあわせてポスターにしても物語性が表現できる。

いずれの活動も複合的にしなければ効果が上がりでの発表とした場合に、小中合同のグループを作らない、ということではなく、集団や状況にあわせて発表³⁾を試みたり、中学生が小学生の聴衆となっ組み合わせて行える。また、基本的には子どもたちたり、その逆になってみたり、様々な関わりが考えに好きな歌を選ばせることとなるが、同じ歌を選んられる。

本稿は俳句から和歌へと事例を絞ったが、小中連者と表現もより豊かになると考えられる。なお、携に異学年交流をあわせてみたとき、『竹取物語』をはずしたのは、作者の感情がこの歌だけからは讀での提案を加えたいと思う。み取ることは難しいと判断した事による。

1. 4. 小中連携の視点

和歌（『万葉集』）と再び国語の授業で出合うのは中学校第3学年となる。楽しく学習したことを思

1. 5. 1. 『竹取物語』を串とする

《『竹取物語』冒頭部分》

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

(1)小中連携の視点

①小学校第1学年

・絵本『かぐやひめ』の読み聞かせ

「かぐや姫」のお話として楽しく知ることができればよい。

②小学校第5学年または第6学年

・上記冒頭部分の暗唱

リズムを楽しみながら、『かぐや姫』のことも思い出しながら音読する。

③中学校第1学年

・上記冒頭部分の暗唱及び物語の内容理解

「物語の祖」としての位置づけ、古文に抵抗なく内容理解へと進めるとよい。

(2)小中交流の視点

1. 5. 1. (1)①の読み手を中学生が務める⁴⁾。読み聞かせは、相手意識を持っていることがあり、すぐに反応が見られるところから、生徒の意識はとて高いので、充実した時間となることが予想される。

②はグループで練習をする時など、中学生と一緒に混ざること、誤読（「もと」の抑揚とか）の確認なども行え、読み方が向上すると考えられる。⁵⁾

③は内容を理解した中学生が、小学校中学年に古文をまじえた読み聞かせや発表学習を行う。それを受けて②の段階で暗唱をするとより、興味関心が湧くのではないか。

	授業の流れ	参観者による気づき
10:40	★始業挨拶・授業準備	
10:50	■起立し全員揃って「寿限無」「竹取物語」「春はあけぼの」「春暁」暗唱	・児童の表情は明るく楽しんでいる ・「竹取物語」「春はあけぼの」は個人差有り。
10:52	■自分が暗唱する作品を決める ～ワークシート配布, 記入～	・教師の指示を正確に理解できている児童が多い。
10:57	■自分が暗唱する作品を視写 ・終わり次第微音読	▽全体の前での指示があれば, もっとスムーズだったか。
11:08	■音読発表のグループと順番決め, グループごとに練習 □寿限無 … 4班 □竹取物語 … 2班 □春はあけぼの… 1班(女2):廊下 □春暁 … 1班(男4):階段	▽階段での練習グループが, 教師の目の届かない中で遊びながら練習しているのがやや怖い気がした。 踊り場で, とかの方がまだよかったか。 ▽練習は, どのグループも熱心に楽しそうに行っていた
11:20	■音読発表会 1「春あけ」分担読み, 斉読の工夫 2「竹取」 分担読み, 斉読, 立座の工夫 3「寿限無」ひたすら一生懸命斉読 4「春暁」 斉読(題名), 分担読みの工夫 5「寿限無」大変なめらかに斉読 6「寿限無」分担読み, 立座の工夫 7「寿限無」アイコンタクトで上手に斉読と分担読み 8「竹取」 分担読み, 前後に出る工夫	▽発表会の始まりと終わりの型は, いちいち指示をしないですむように, 事前に全体に提示しておくロスがない。 ・児童の聞く姿勢もよくできていた。
11:30	■講評 ・参観者, 学級担任	
11:35	★終業挨拶・ワークシート回収	

〈参観者の気づき〉

- ▽児童の集団として、教師の指示に集中し、場面ですばやく切り替えることのできる訓練ができていて、学習活動にロスが少ない。
- ▽誤読があること、読み方のブラッシュアップを考へても、どこかで授業者が関わり、指導する必要がある。
- ▽いくつかのグループで、誤読やイントネーション、言葉の切り方を助言したが、すぐに直して、本番もきちんとできていた。
- ▽「春暁」グループは、練習時は元気に上手に読めていた。
(本番で教卓に隠れた子も大きな声でにこにこ笑顔で読めていた)
- ▽授業者も児童も落ち着いた雰囲気に進んだのは、学習内容の時間配分が適正だったこともあると思われる。この授業での延びた時間は、学習内容に関わらないところで短縮できる。
- ▽全体での指示と、グループ、個別の指示を整理しておくにより自然に流れると思う。
- ▽授業者が教室の隅々まで配慮しようという想いが、児童にも伝わり、学級担任との信頼関係も大きく、一体感のある教室が実現していた。

Ⅲ 終わりに

古典教育の意義はその時代によって趣が異なるが、中学校においては、従来高等学校における学習へ向けての本格的な入門期であるという位置づけは一貫してきた。しかし、このたびの指導要領の改訂にともない、あらたに小学校において入門期としての古典教育が位置づけられることとなり、中学校における古典学習はこの小学校の学習を受けるという位置づけが成されたのである。

情報処理量が劇的に増える高等学校での学習に向けて、小学校・中学校を見通した古典学習の単元開発を行うことが、古典学習へのより深い取り組みに繋がるのではないかと考えている。小学校から中学校へ、中学校から高等学校へと古典教育の流れを追っていくことで、子どもたちと古典との距離が縮まるような実践を組み立てたい。そのためには、小学校の現場を知ることとはとても大事であるし、古典に親しみ楽しいという子どもたちを増やしていきたい。

資料

◎小学校学習指導要領（平成20年3月告示）より 第2章 各教科 第1節 国語

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

〔第1学年及び第2学年〕

- (1)ア(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

〔第3学年及び第4学年〕

- (1)ア(ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。

- (イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

〔第5学年及び第6学年〕

- (1)ア(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り音読すること。

- (イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

◎ 中学校学習指導要領（平成20年3月告示）より

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

〔第1学年〕

(1) ア(ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、
古文や漢文を音読して、古典特有の
リズムを味わいながら、古典の世界
に触れること。

(イ) 古典には様々な種類の作品があること
を知ることを知る。

〔第2学年〕

(1) ア(ア) 作品の特徴を生かして朗読するなど
して、古典の世界を楽しむこと。

(イ) 古典に表れたものの見方や考え方に
触れ、登場人物や作者の思いなどを
想像すること。

〔第3学年〕

(1) ア(ア) 歴史的背景などに注意して古典を
読み、その世界に親しむこと。

(イ) 古典の一節を引用するなどして、古
典に関する簡単な文章を書くこと。

《参考》現行 小学校学習指導要領

〔第5学年及び第6学年〕

〔言語事項〕

(1) 「B 書くこと」及び「C 読むこと」の指導
を通して、次の事項について指導する。

エ 文語調の文章に関する事項

(ア) 易しい文語調の文章を音読し、文語の
調子に親しむこと。

《参考》現行 中学校学習指導要領

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に
配慮するものとする。

(4) 第2の各学年の内容の「C 読むこと」に
関する指導については、次の事項に留意す
ること。

イ 古典の指導については、古典としての
古文や漢文を理解する基礎を養い古典に

親しむ態度を育てるとともに、我が国の
文化や伝統について関心を深めるように
すること。その教材としては、古典に関
心をもたせるように書いた文章、易しい
文語文や格言・故事成語、親しみやすい
古典の文章などを生徒の発達段階に即し
て適宜用いるようにすること。なお、指
導に当たっては、音読などを通して文章
の内容や優れた表現を味わうことができ
るようにし、文語における言葉のきまり
については、細部にわたることなく、教
材に即して必要な範囲の指導にとどめる
こと。

引用・注

- 1)・5) 小山進治教諭による授業実践
：横浜市立篠原西小学校：2008
- 2) 細谷俊太郎主幹教諭による授業実践「教科日本語」
：世田谷区立赤堤小学校：2009
- 3)・4) 森顕子：東京学芸大学附属学校研究紀要
第34集「異学年（小学校・中学校）交流授
業の工夫－三つの実践から－」：2008
- 5) 《参考》1. 5. 1. (1)②授業記録参照。